

宮城県立こども病院が「シブシヨップ」 患者の心ケア



**シブシヨップでボランティアと元気に遊び回る
子どもたち = 宮城県立こども病院**

宮城県立こども病院（仙台市青葉区）が、患者の兄弟姉妹の交流会「シブシヨップ」に力を入れている。親が、患者である子どもの世話にかかりっきりとなることで、その兄弟姉妹は孤独感や不安感を覚えるケースが多いという。同じ境遇の子ども同士で遊ぶことで、気持ちを和らげてストレスを発散させようと、病院スタッフやボランティアらが創意工夫を重ねている。

今月11日、夏休み中の16人の小学生がシブシヨップに集まった。中庭でしゃぼん玉づくりに夢中になったり、チーム対抗でカレーの具をそろえるゲームではしゃいだりした。「みんなと友達になれそう」と、仙台市古城小3年の渥美伊吹君（9つ）は笑顔で駆け回った。

終了間際、子どもたちに2枚の紙が渡された。「ピンクの紙には、病院に来ている（患者の）兄弟姉妹の好きなおとこ、緑の紙には嫌いなおとこを書いて紹介して」

患者やその兄弟姉妹の精神的サポートを担当するチャイルド・ライフ・スペシャリスト藤井あけみさん（47）が呼び掛ける。子どもたちはげげんそうな顔を浮かべながら文章や絵をかき始めた。

「笑顔がかわいい」「野菜をちゃんと食べる」「悪口を直してほしい」「言うことをきかない」。発表できる子がいる一方、「言いたくない」と黙ってしまう子も。

「親の関心が患者の子に向かいがちとなり、兄弟姉妹は我慢を続けてストレスを抱えたり、患者の子に否定的な感情を持ったりすることもある。人前で話せなくても、自分だけの悩みではないと気付けば、心のわだかまりが解消されていく」。藤井さんはプログラムの狙いを説明する。

小学4年の娘が参加した仙台市の高橋邦子さん（37）は「シブシヨップの意義を今すぐ理解できなくてもいい。将来、重病や障害のある兄弟姉妹がいることについて語り合える友人をつくってほしい」と話す。

こども病院のシブシヨップは昨年7月に始まり、今回で3回目。次回は来春に予定している。藤井さんは「1回でも参加することが貴重な体験になる」と話している。

[シブシヨップ] 重い病気や障害のある子どもの兄弟姉妹を支援する活動。米国の市民団体が、英語で兄弟姉妹を意味する「sibling（シブリング）」と「workshop（ワークショップ）」を合わせて造った言葉。こども病院では、兄弟姉妹の交流会の意味で使用している。